

志賀重昂の『日本風景論』

— 欧米的景観への憧憬 —

荻原 隆

序 論

本稿は志賀重昂（文久三年・1863～昭和二年・1927）の『日本風景論』（明治二七年）を取り上げる。これは処女作『南洋時事』（明治二〇年）とならび称される彼の代表作である。『日本風景論』については国粋主義とのかかわりですでに論じたことがあるが⁽¹⁾、本書自体をあらためて考察し、彼が意識的・無意識的にこの書に込めた意図を明らかにしておきたい。本書は文字どおりの題名であるから、郷土愛・ナショナリズムの書として紹介されることが多いが、それはまったく間違いではないにしても、むしろ相当な誤解を含むと言ってよい。本書の出発点は大陸的とくに欧米的景観へのコンプレックスであり、無理に無理を重ねて日本風景の中からこういう景色を拾い出そうというのがその意図なのである（本書の意図は彼の生涯の思想を通観してみればいっそうよく分かる）。

志賀が日本の風景に着目したのは国粋主義として良い視点である。日本は中緯度に位置しなおかつ島国（海洋性）であるから、やや湿気・雨は多いが、その気候・風土のおだやかさは世界でも稀有な部類であろう。文化が早く開けた西日本はとりわけそうである。国粋主義者がなぜこの風土を誇らなかつたのか、この地理気候と日本人の精神生活のかかわりを考えなかつたのか不思議なほどである。志賀だけが『日本風景論』を書いた。けれども、彼は本質的には英米崇拝者で、たまたまとくに人間関係から国粋主義の陣営に身を投じているところがあつたため、せつかくの視点を生かしきれなかつた。同書はすぐれた着想を持ちながら、国粋主義という視点から見ると完全な失敗作となつてしまつたのである。

注

- (1) 本論は「国粋主義の条件—志賀重昂の思想」（『名古屋学院大学研究年報』10, 1997年12月）などをもとに志賀の『日本風景論』自体をあらためて考察したものである。なお、最近の関連の拙稿として「日本における伝統型保守主義はいかにして可能か—志賀重昂との関連で（上）」（『名古屋学院大学論集（社会科学編）』第四三巻第四号, 2007年3月）、「日本における伝統型保守主義はいかにして可能か—志賀重昂との関連で（下）」（『名古屋学院大学論集（社会科学編）』第四四巻第一号, 2007年7月）、「志賀重昂における国粋主義の概念—概念の両義性と論理の混乱」（『名古屋学院大学論集（社会科学編）』第四五巻第二号, 2008年10月）などがある。

一 『日本風景論』 への誤解

志賀が「国粹」をめぐる何かを語るのは明治二〇―二二年のわずか二年ほどの間にすぎない。しかし、その後も一〇年ほど政教社の中心であり続けたのだから、日本の伝統をたえず意識はさせられたであろう。『南洋時事』とともに彼の代表作である『日本風景論』⁽¹⁾はタイトルからしてそうである。

『日本風景論』は刊行に先立ち、まず、『亜細亜』(発刊停止となった『日本人』の後身)や復刊された第二次『日本人』にその概要などが掲載された。その点は以下のとおり。

- ① 「日本風景論」, 『亜細亜』第三巻第一号(明治二六年一二月一日): 『日本風景論』の概要をまとめたもの。
- ② 「火口湖(日本風景論一節)」・「玄武岩(日本風景論一節)」, とともに『亜細亜』第三巻第三号(明治二七年一〇月二一日): 『日本風景論』の「日本には火山岩の多々なること」の(十)「火口湖」・(十一)「玄武岩」の部分。
- ③ 「日本風景論二節」, 第二次『日本人』第一六号(明治二七年一〇月二五日): 『日本風景論』の「雑感」の(第八)「自然の太妙は変々化々限り無き間に在り」と、「日本には流水の浸蝕激烈なること」の(三)「石灰岩に於ける浸蝕」の部分。
- ④ 「日本風景論(補遺)」, 第二次『日本人』第一七号(明治二七年一二月二五日): 例の「(一) 瀟酒, (二) 美, (三) 跌宕」の記述で、二版に書き加えられたもの。この点は後述参照。

本書は明治二七(一八九四)年一〇月二七日に一書として出版されるや、たちまちベストセラーとなり、版を重ねていった。しかし、伝統にそれほど愛着が持てず、西洋に強いコンプレックスと憧憬を感じる彼の体質はこのいかにも国粹主義者らしいタイトルの著書にもかなりはつきりと出てくるのである。

日本の風土をテーマにするという着眼点は国粹主義者としてはまことに良い。日本の風土はおだやかな美しさにおいて世界に比類がない。なぜ国粹主義者がこの風土を誇らなかったのか、なぜ風土と日本人の精神の深い関係についてよく考えてみななかったのか、なぜ同時代の伝統的ナショナリストたちは本書のようなものを作らなかったのか不思議なほどである。志賀だけが『日本風景論』を書いた。しかし、通読すると、予想を裏切られ、落胆させられる。

ところが、内村鑑三が誤解したように(後述)、多くの人は国粹主義の先入観で本書を額面どおりに読んでいて、郷土愛・祖国愛が『日本風景論』のモチーフであるというような言い方をする。たとえば、岩波文庫版の解説者近藤信行氏は志賀をそのまま国粹主義者、この本を風景ナショナリズムの書と受け取っていて、青春時代を回想しながら、戦争で東京は荒れ果ててしまったが、山は美しい自然に満ちていて、自分は登山に夢中になった、そのときに本書を思い起すのだったとか、「彼の国土に対する情熱的な、ここからほとばしる愛情はいまなお生き続けている。」と感慨を込めて書いている⁽²⁾。これは間違いではないが、かなり問題を含んだ解釈である。この典型が小島烏水(久太、一八七三～一九四八年)である。烏水は横浜正金銀行に勤め、かたわら『文庫』の記者となる。日本山岳会の創設に参加し、初代会長を努めたアルピニストの

草分け的存在。彼はこう書いている。

『日本風景論』を書いたのも、国土の愛から出立したのである、足許から一握の土をすくって、隣人の前に突き出し、この土の匂いを、どうおもうかと訊ねたとき、隣人は、セメンかコンクリートでなければ文明開化の土でない、ふだん妄信しているから、そんな土は、汚いと顔を反ける、いづくんぞ知らん、この土は、富士の白雪の融けて流れた土である、こんな美しい土が、世の中にあるのか、これを説いたのが、『風景論』だとおもえばいい。」⁽³⁾

一握の汚い土、実は富士の白雪の融けたもの、こんな美しい土があろうか、国土への愛から『日本風景論』は生まれたというのが烏水の解説だが、かなりの外れで、題名にだまされている。志賀は本書のなかで日本の風景のおだやかな美しさを語るふりをしながら、実は相当無理をして日本の雄大な風景、あるいは辺境的景観を拾い出したのである。だから、『日本風景論』には高山・火山や海流、あるいは異次元的な非日常的な風景が多数登場してくる。たしかに、日本列島は南北に長く、中央に三〇〇〇メートル級の山脈があり、しかも海に囲まれているから、景色もけっこう多様ではある。激しい潮流も、高い山も、雄大な景観も、異境的な地形も探せば少なからずある。しかし、たとえばいかに高山を取り出しても、ヒマラヤにアンデスにかなうわけがない。関東平野や濃尾平野が広いと言っても、大陸の平原や砂漠や草原はけた違いである。広大で偉大、また、怪奇で荒涼たる風景という点で日本は問題にならない。とくに、文化が早く開けた西日本は周知のように気候は温暖、山々は低くなだらか、平野・盆地・河川は小さく、おだやかでやさしい風貌を持つ。ちなみに、志賀の故郷は岡崎で、ここの風土環境ももちろんそうである。

ところが、志賀は日本のおだやかで美しい風景に飽き足らず、無理をして雄大な、また辺境的な風景を拾い出した。これは欧米のスケールの大きな風景に、あるいは新大陸や大洋へと乗り出していった欧米人の進取の精神に強くあこがれていたからである。三田博雄氏は近代西洋の審美的範疇「崇高」にコンプレックスを持っていると言⁽⁴⁾、前田愛氏は志賀の故郷である岡崎の平淡温雅な風景が意識的に切り捨てられ、伝統的な風景感覚とは違った荒々しいエキゾティズムがまぎれこんでいると評⁽⁵⁾、猪瀬直樹氏は、発行当時から本書の「大きさ」「奇抜さ」「異様さ」に驚いたという書評がかなりあったことを紹介している⁽⁶⁾。これらは国粋主義や書の題名に先入観を持ち、幻惑されてしまった烏水らなどの論評よりずっと的確である。

志賀は広大な大陸の、また激烈な大洋の風景に魅せられた。日本人も欧米人のようにこういう広大なあるいは未知の新天地に乗り出してほしい、それだけの勇気や冒険心、進取の気性を持って欲しい、これが本書にこめた志賀のメッセージである。この点を本書に即して確認してみる。

注

- (1) 同書の書誌的考察については、志賀重昂『日本風景論』（平成七年、岩波文庫）の小島烏水および近藤信行の「解説」、初版の復刻版である志賀重昂『日本風景論』（昭和五四年、飯塚書房）付録の志賀富士男・山崎安治・猪瀬直樹の『日本風景論解題』などを参照。『日本風景論』各版の異同については猪瀬直樹氏が詳しく調べている。猪瀬「評伝・志賀重昂と『日本風景論』」、前掲『日本風景論解題』、七七～八、八三～五頁。なお、『日本風景論』の引用はとくに断らない限り、飯塚書房版を用いる。

- (2) 近藤信行「解説」, 近藤信行校訂『日本風景論』(平成七年, 岩波文庫), 三八三~四, 三九五頁。
- (3) 小島島水『『日本風景論』(岩波文庫初版) 解説』, 近藤信行校訂『日本風景論』(平成七年, 岩波文庫), 三七三頁。
- (4) 三田博雄『山思想史』(昭和五八年, 岩波新書), 六〇頁。
- (5) 前田愛「江山洵美是吾郷」, 松本三之介編『政教社文学集(明治文学全集 37)』(平成元年, 筑摩書房) 付録。
- (6) 猪瀬直樹「評伝・志賀重昂と『日本風景論』」, 前掲『日本風景論解題』, 九二~三頁

二 『日本風景論』の分析

故郷のイメージ 本書はいかに故郷がなつかしく恋しいものであるかという書き出しで始まっており, いかに『日本風景論』らしい導入部と思われるが, それにしては取り上げる場所がまことに風変わり, 奇怪である。

「『江山洵美是吾郷』と, 身世誰れか吾郷の洵美を謂はざる者ある。青ヶ島や, 南洋浩渺の間なる一頃の噴火島, 爆然轟裂, 火光爛々, 天日を焼き, 石を降らし灰を散じ, 島中の人畜殆んど斃れ尽く, 僅に十数人の船を舩して災を八丈島に逃れたるあるのみ, 而かも此の十数人竟に其の噴火島たる古郷を遺却せず, 火の熄むを待つこと十三年, 乃ち八丈を出で欣々乎として其の多災なる古郷に帰りき。占守や, 窮北不毛の絶島(千島の内), 層氷累雪の処のみ, 後, 開拓使有司の其の土人を南方色丹島に遷徙せしむや, 色丹の地棋楠樹青蒼, 落葉松濃かに, 黒狐, 三毛狐其蔭に躍り, 流水涓々として処々に駛り, 玉蜀黍穫べく馬鈴薯植うべく, 田園を開拓する者は賞与の典あり, 而かも遷徙の土人, 新楽土を喜ばずして, 帰心督促, 三々五々時に其の窮北不毛の故島に返り去る, シカゴの博覧会近世期に於ける人智の粹を尽くし, 会場亦た金碧設色, 眩耀眼を奪ふ, 中にエスキモー土人の村落を置き土人此処に居る幾多, 而かも之れを欲せず, 其の氷山雪塊の本国に逃れ去らんとしき。」⁽¹⁾

冒頭の「江山洵美是吾郷」は後の版から「(大槻磐溪)」と作者名がはいってくる。ただ, この詩句は改変されていて, 前田愛・大室幹雄氏によれば正しくは「江山信美是吾州」で磐溪文久二年の作。出典は『昨夢詩曆 卷之下』(明治四年)の「東婦紀行三十首(節録十八首)」の最後を飾る七絶の終わりの部分⁽²⁾。『昨夢詩曆』は磐溪の二子如電・文彦編の『寧静閣三集』(明治三〇年)に再録されている。なお, 前田氏は原詩を「我州」と紹介しているが, これは「吾州」が正しく, また磐溪は『松島紀行』の中でもこの「江山」の表現を繰り返しているとも述べているが, これは『松島奇賞』(慶応三年作, 出版は明治元年, 大槻如電・文彦編で明治四一年刊の『寧静閣四集』に再録)の誤りではないかと思う⁽³⁾。

磐溪の漢詩を引き合いに, どこであれ故郷は忘れたいものであると言うために, 志賀はなんと八丈島から青ヶ島へ, 色丹島から占守島, はてはシカゴからツンドラへ原住民が帰っていった例をあげている。これは実に風変わりである。我々日本人がイメージする故郷はほぼ決まっていて, 唱歌「ふるさと」の文句ではないが, なだらかな山裾の, 緑豊かに, 澄んだ水の流れる, おだやかで平和な農村というようなところである。「ふるさと」の作詞者高野辰之の出身地長野県を含む中部地方は山が険しいが, それでも日本人の描く故郷は山紫水明の山裾かそこに開けた狭

い平野・盆地のような場所，そして平和で静かな村落のたたずまいと相場ができています。文化が早く開けた関西地方や志賀の故郷岡崎になるといっそう風景がやさしい。ところが，志賀の挙げた場所はこの通念とはまったく切れていて，まことに異境的である。これは彼の関心が日本の原風景よりも異境的な，新たな世界に向けられていたことを物語っている。

日本の風景の特徴 彼はこの著作で日本の風景を世界一であると絶賛し，その特徴を四つにまとめ，これを本書の基本的な構成にした。

- 一、日本には気候，海流の多変多様なる事
- 二、日本には水蒸気の多量なる事
- 三、日本には火山岩の多々なる事
- 四、日本には流水の浸蝕激烈なる事⁽⁴⁾

これらはたしかに日本の地理環境の特徴として間違っていないであろう。しかし，こう聞かされると，多少違和感を覚えないでもない。というのは，もっとも特徴的な要素がいくつか脱落しているように見えるからである。たとえば，言うまでもないが，日本の風土の最大の特徴のひとつは島国であり，したがって自然のスケールが小さいということである。大陸の風土に比べるとすべてが箱庭的もしくは園芸的に映る。もうひとつは海洋性と中緯度のために温暖でおだやかということである。酷暑でも，厳寒でもない，雨がやや多く，緑は豊かであり，荒涼たる砂漠や草原や黄土を知らない。インドや中近東やロシアとはもちろん，ヨーロッパ諸国と比べても，日本の気候はマイルドであるし，アメリカや中国のほぼ同じ緯度に属する諸都市・諸地域に比べても寒暖の差が少ない。梅雨はあるが，すべてを押し流す豪雨の季節も，灼熱の乾季も持たない。

ところが，志賀は日本の風景の特徴を大きく概括するのに，小さいとか，温和とか，おだやかという形容詞を一切使わず，それとは対称的な表現「多変，多様，多量，多々，激烈」で描き出そうとした。これは，いささか意外な感じがする。もちろん，志賀は，日本は「水蒸気の多量なる事」と概括したあとで，だから，日本は外国と違って草木が豊かで美しいと説明している⁽⁵⁾。しかし，「緑が豊かで美しい」と書くのと「水蒸気の多量なる事」と要約するのは印象が違って，後者の表現を使うと日本の風土がどことなくより活気を帯びてくる。また，温暖であることと並んで，島国であることが日本の大きな地理的特徴で，もちろん，分かりきったことであるから，「海流の多変多様」を言えば当然それで島国の状況説明になっていると思ったのかもしれない。しかし，「島国」と書くのと「海流の多変多様」と書くのでは，やはり受けるイメージが違う。「海流の多変多様」と表現すれば，にわかに日本の風景がなんとなくスケール・アップされ，勇壮活潑なものになってくるのではないか。志賀は日本の風土をこれまでの通念よりも活気に満ちて変化の激しいものとして描きたかったように見える。

日本の風土への共感と拒否 もとより，本書には伝統的・通念的な景観美に対する礼賛もふんだんにある。土地にちなんだ和歌や俳句がひんばんに引用されるのも，伝統的な美意識への尊重・共感であろう。たとえば，緒論には，次の頼山陽の今様を配して，日本の風土美を絶賛した。「花より明るく三芳野の春の曙みわたせはもろこし人も高麗人も大和心になりぬへし 頼山陽」⁽⁶⁾ これはまた，いかにも日本的な平和で美しくやさしい風景である。史論家そして漢詩人として名高

い頼山陽がこんな今様を作っていたとは多少意外であるが、徳富猪一郎監修、木崎愛吉・頼成一共編『頼山陽全書』八巻所収の木崎『頼山陽全伝』上下（昭和六～七年）の下巻文政一〇年三月二一日のところに出てくる。山陽はこの年の三月吉野に遊び、「この今様、山陽作といふことに間違ひなくば、この遊中の偶吟であろう。」とやや自信なさそうな木崎の解説がある⁽⁷⁾。この今様のうらかな桜の花に象徴されるように、『日本風景論』は草木や花の多様性や美しさ、またそこに囀る鳥、富士の姿、紅葉の見事などを挙げて、日本の景観を称えた。この点で、本書は伝統的な美意識の流れを汲む。

しかし、志賀はこういう花鳥風詠的な景色に飽きたらなかつたようである。海流の多様性と激しさ、山の高さ海の深さ⁽⁸⁾、急流による浸食、多くの火山や奇岩を描写せずにはおれなかつた。桜と松柏について彼はこんなふうと言っている。古来、日本人は桜花を愛し、自分たちの心のありさまを象徴させてきた。しかし、「桜花美亦佳、其の早く散る所是れ惜しまるゝ所なるも、忽ちにして爛漫、忽ちにして乱落し、風に抗す能はず雨に耐え得ず、狼藉して春泥に委す所、寧ろ日本人の性情とせんや。」⁽⁹⁾と、桜の花のひよわさ、めめしさが気に入らなかつた。こんなものを日本人の性情の表現と見てはいけな。むしろ、日本人は松柏の姿を模範にすべきである。「想ふ松柏の轟々天を衝くは本性たり、而かも其根を托するの土壤や少量に、四圍の境遇も亦た逆ならんか、仮令其幹をして天を衝かしむる能はざるも、豪気竟に屈せず、断崖絶壁石面稜層の上と雖も猶ほ且つ根を硬著し、」⁽¹⁰⁾で、その剛直で不屈、雄々しい気象こそ我々の精神とすべきものである。志賀はスイス人の独立精神は松林の間に育つたと言ひ、松柏の気性を元寇で勇戦した武士の精神になぞらえている。

彼はこれまで日本の風景の美しさを代表する植物としてさんざん桜花を挙げて絶賛してきた⁽¹¹⁾。すでに述べたように本書でも緒論に頼山陽の桜をモチーフにした今様を引用し、この花を見れば中国人も高麗人も日本人の心情になる、日本は極楽である、また、三版以降になるが、支那・朝鮮には日本のような桜がない、朝鮮の使いが日本に来てその美しさに驚いた、欧米にも桜がないから、春が実に物足りない日本を桜を天まで持ち上げておいて⁽¹²⁾、一転今度は「桜花」を嫌い「松柏」を推奨しているのには啞然とさせられる。一書の中ですら決定的な矛盾を犯すのであるから、志賀がいかにか己の思想の一貫性や論理に無頓着であったかということ、日本の伝統的風景や心情に抜きがたい嫌悪感を持っていたことはここからもよく分かる。

台風については、「以上水蒸気多量の感化する所、佳なるもの、奇なるものに止まる、然れども其の日本国の現象に感化する、豈に単に佳なるもの、奇なるものに止まらんや、豪放の特に豪放、跌宕の最も跌宕なるものに到りては、実に（九）颶風是れなりとす。」⁽¹³⁾という調子で、その勇壮な姿を愛で、日本の風景はただ美しいだけでなく、「豪放」「跌宕」でもあるという主張を補強している。

辺境・異境への関心 日本は南北に長く、中部には三千メートル級の山岳地帯を抱えるから、景観も多様といえば多様である。探せば、勇壮な、雄大なあるいはエキゾチックな風景もある。しかし、多くの日本人は、国土が小さいこともあって、やさしく、おだやかで優美な情趣こそその特徴であると思つてきた。志賀はこういう通念を認め、評価しながら、一方でそれを拒否してい

るのである。だから、本書では雄大な景観が無理をして拾い出されているのに加え、辺境の描写が多い。故郷の例となったのが青ヶ島や占守島、はてはツンドラ（エスキモー）であったことは先述した。台湾が日本の版図になると、さっそくその自然について触れるという具合である。

「四 日本には火山岩の多々なる事」（初版本文では三になっているが、正しくは目次どおりで四）を見ると、日本の火山とそれにちなむ和歌を列挙し、名山の基準や富士の美について語ったあと、とくに「千島列島の火山」の節を設け、その火山島の姿を一覧の図表にして紹介している。そのあとには「北海道本島の火山」という節が来る。おそらく、当時の日本人にとって、北海道はもとより、千島の火山となるとほとんどなじみのなかったものであろう。志賀は札幌農学校の出身で北方には青春から格別の縁があった。明治一六年一月、胆振の樽前火山の爆発を農学校教師の宮部金吾と一緒に見に行ったほどであるから⁽¹⁴⁾、北海道・千島の火山に興味を持っていたのは当然である。しかし、一般国民には明らかに知られざる辺境の物珍しい風景として映ったはずである。

千島や北海道の火山に限らず、もともと山は、海の彼方や北方が水平的な辺境であったとすれば、垂直的辺境である。第四章の付録「登山の気風を興作すべし」⁽¹⁵⁾は、登山の勧めであり、言に相違して志賀自身はさほど登山の経験がなかったようであるが⁽¹⁶⁾、彼の関心が水平的にか垂直的にか辺境や処女地に向けられていたことはよくわかる。

一体に、本書の表紙・差し絵・図表には高山、火山、火山島、奇岩、洞窟の類が多いが、これも物珍しい、異次元的な風景である。われわれが日常的によく知っている日本の風景、たとえば人と自然が溶け合ったのどかな村落のたたずまいなどというものは挿し絵として選ばれていない。志賀は、優美な日本の風景を描きつつ、どこかでそれを拒否しているのである。

内村鑑三は『六合雑誌』第一六八号（明治二七年一月二五日）に本書初版を批評して、日本の風景は園芸的な美しさがあるが、壮大な、雄渾な、人を高める美がないという趣旨のことを言っている⁽¹⁷⁾。これは日本の風景評としては的確である。日本の風景は平和でおだやかな美しさを持つが、一般にスケールが小さく、どうしても箱庭的になってしまう。ただ、内村の意見は日本の風景自体に対しては適切であるが、志賀の本書に込めた意図を取り違えている。この点、烏水と同じ誤解がある。志賀は日本の伝統的な景観美を描き出しつつも、一方、一内村の意見を待つまでもなく一もともとそれに飽き足らなかつたからである。どこかで、日本的な風景を拒否し、そこから抜け出そうとする、冒険的、開拓者の心音が押さえ切れなかつた。

瀟洒・美・跌宕 それでも、この内村の書評を意識したのであろうか、志賀は二版（明治二七年一二月）では日本の風景の特色を新たに（一）瀟洒、（二）美、（三）跌宕という三つの観点から整理しようとする記述を緒論に付け加え（これは前述のように「日本風景論（補遺）」として第二次『日本人』第一七号（明治二七年一二月二五日）にも掲載）、三版（明治二八年三月）ではさらに（一）瀟洒の瀟洒たるものに「日本の秋」、（二）美の美たるものに「日本の春」を配した。

（一）「瀟洒」の例は新緑にホトトギス、梅に竹、宮城野の鈴虫に萩と秋風、河を渡る雁に秋月、奈良の鹿鳴など、（二）「美」の例は名古屋城と楊緑、桃山の紅葉、嵐峡（嵐山）の春、北信濃の菜花と千曲川、桜島の緑など、（三）「跌宕」の例は那須の広野、太平洋は八丈島と小笠原列

島の中の奇岩（筍岩・ロットのワイフ）、信濃は絶壁にそびえるブランド薬師、白川関の秋、富士と武蔵野、立山、阿蘇、樽前山、千島の風景、日本海と鳥海山、最上川と滝などである⁽¹⁸⁾。ちなみに、ブランド薬師というのは妙な名前であるが、長野市の薬山（689m）の絶壁にぶら下がるように建てられた八幡神社のことで、「浮欄度八幡」と呼ばれたことから、あるいはブラブラと揺れたことからとも言われる。

（一）「瀟洒」は情趣に溢れるとか詩情豊かなという意味であろう。志賀の挙げた例が適当かどうかはともかく、日本の秋が「瀟洒」であることは素直に納得できる。（二）「美」は文字通りで、春の桜から始まって秋の紅葉にいたるまで季節の移り変わりがことさら鮮やかな日本であるから、この点も異論はないだろう。

問題は（三）の「跌宕」である。これは、辞書を引くと「細事にかかわらぬこと」と出ており、前述のように、志賀自身が台風を説明するところで「豪放」と並べて「跌宕」の表現を使っているから、雄大・荘厳あるいは奇怪・異様というような意味であろうが、これが日本の景観の特徴だと言われるといささか意外な気がしないでもない。彼の挙げている例はなるほど雄大と言えばそうであるが、しかし、スケールの大きさということになれば日本の風景は外国のそれに比べて各段に分が悪い。那須が広いと言っても、大陸の草原や砂漠は桁違いである。ブランド薬師が奇怪であると言っても、世界標準で見てもなおに肯定できようか。日本にもとくに中部山岳地帯には高山が多いが、それでも高さや規模において、ヒマラヤやヨーロッパアルプス、ロッキーやアンデスとは勝負にならない。那智の滝もナイアガラやイグアスを引き合いに出されれば、まるで子供だましと言ったら言いすぎか。八丈島と小笠原列島の中に屹立する奇怪な岩（筍岩）に至っては日本人の日常的な風景空間の外の話である。「跌宕」はとうてい「美」や「瀟洒」と並ぶほどの日本風景の特色ではない。とくに、文化の先進地帯、西日本の風土はすべてにスケールが小さく、「跌宕」とは正反対である。

注

- (1) 『日本風景論』、一～二頁。
- (2) 前掲前田論文、大室幹雄『志賀重昂「日本風景論」精読』（平成一五年、岩波現代文庫）、一六九～七二頁。
- (3) 『寧静閣集』については、富士川英郎「解題」、富士川英郎・松下忠・佐野正巳『詩集 日本漢詩』第一七卷（平成元年、汲古書院）、四頁。
- (4) 『日本風景論』、三頁。
- (5) 同、九頁。
- (6) 同、二頁。
- (7) 木崎愛吉『頼山陽全伝』下（昭和七年）、一九二頁。
- (8) 『日本風景論』、一八頁。
- (9) 同、一〇頁。
- (10) 同、同頁。
- (11) 「如何ニシテ日本国ヲ（シテ）日本国タラシム可キヤ」、『国民之友』第一〇号（明治二〇年一〇月二一日）、『日本人』が懐抱する処の旨義を告白す、第一次『日本人』第二号（明治二一年四月一八日）など参照。

- (12) 前掲近藤信行校訂『日本風景論』、一八～二二頁。
- (13) 『日本風景論』、四三頁。
- (14) 「初対面録」二、第三次『日本人』第四号（明治二八年八月二〇日）
- (15) この部分に Francis Galton, *Art of Travel* (1855) からの剽窃があることについては、黒岩健『登山の黎明—「日本風景論」の謎を追って』(昭和五四年、ベリかん社) 第三章に詳しい。
- (16) その実、志賀が登山に関心がなかったことも、前掲黒岩書、三〇～二、一五三～五頁。ただ、黒岩氏が国粹主義と登山思想がしっくり結びついていない、「海の人」が「登山の煽動者」となったのは不可解だと言うのは、志賀を純然たる国粹主義者と誤解しているからではなからうか。国粹主義ないし伝統主義を一種の閉鎖主義と考えれば（同氏がそう言っているわけではないが）、たしかに山の開拓とはもちろん、そもそも海の開拓ともうまくなじまない。けれども、彼の思想の本質は欧米をモデルとする一種の開拓者精神であるから、本格的な登山をしたかどうかはともかく、海洋であれ、大陸であれ、山であれ、そこに挑めという思想は彼本来のものである。
- (17) 内村の書評は、近藤信行校訂『日本風景論』（平成七年、岩波文庫）に資料として載せられている。
- (18) 前掲近藤信行校訂『日本風景論』、一四～二三頁。

三 小結—欧米的景観への憧れ

ところが、志賀はかなり無理をして雄渾な日本の風景を拾い出そうとしている。これは内村が日本の風景はいかにも園芸的だと批評したことに反発したかったからかもしれない。しかし、志賀はもともと日本の風景空間を越えていこうとする強い志向性を持っていた。激しい海流、火山脈の姿、登山の奨励、北方や海の彼方の辺境、壮大な風景への憧れ、これらは水平的にか垂直的にか、辺境を目指す者の開拓者の風景観である。冒険的でロマン的である。『日本風景論』は日本の風土を愛しつつも、それに満たされず、ひそかに荒野を目指す者の空間意識を示している。内村の言うのとは違って、本書の空間意識はけっこう壮大なのである（なお、たとえば本書を膨張的・征服的な風景論と見る向きもあるようだが、侵略主義といちおう区別しつつこの言葉を使うにしても⁽¹⁾、誤解を招くのではないか。開拓者のと評するのが正しいと思う。彼は基本的には武力主義は嫌いだった）。

ただ、問題はこれが国粹主義者の風景論だということにある。国粹主義者は、たとえ日本の風景が園芸的、箱庭的であろうとも、あくまでもそれを愛し、その良さや美しさをさまざまな角度から考え、風土の持つ精神性を一時には厳しく批判しつつでもよいから一国民生活の中に生かしていかなければならないからである。ところが、志賀の意識はひそかにこういう風景を逃れて、辺境に向かおうとしている。これは、言うまでもなく、辺境をめざし、それを次々に開拓征服していった、西欧文明の空間意識の流入であり、その模倣である。志賀が西欧主義者ならそれでよい。しかし、国粹主義者の風景論としては失敗である。

繰り返しになるが、日本の風土をテーマにするという着眼点は国粹主義者としてはまことに良いものである。同時代のナショナリストたちがおだやかな美しさにおいて世界に比類がないこの風土をなぜ取り上げなかったのか不思議なほどである。志賀だけが『日本風景論』を書いた。しかし、日本の風景から無理をして西洋的な景観を拾い出そうとしたこと、日本の風景を大陸の景

観の枠組みで語ろうとしたことで、せっかくの着想を生かせなかった。国粹主義のスローガンや本書の題名に惑わされて、日本の風土への賛美という評価が一人歩きしただけのことである。

注

- (1) 志賀重昂『日本風景論』(昭和五四年, 飯塚書房) 付録, 猪瀬直樹「評伝・志賀重昂と『日本風景論』」の第二章の「風景論とナショナリズム」参照, 猪瀬氏は侵略主義と微妙に区別してこの言葉を使っているが, やはり侵略主義を連想するであろう。また, 山本教彦・上田誉志美『風景の成立—志賀重昂と『日本風景論』』(平成九年, 海風社) も『日本風景論』と膨張主義の連関を暗示している。とくに終章参照。

本稿執筆に当たって, 京都教育大学国文学科の谷口匡氏より頼山陽についてご教示を受けたことを記して深謝する。